

【活動名】 学校改善のためのカリキュラム・マネジメントの実践

解決すべき課題：

本校の教育課程を児童の実態や児童に付けたい力、地域の特性から問い直す必要がある。そのためには教職員の意識を改革し、学校行事等の改善に努め、校内研究を軸とした授業改善を進めることが主な課題として挙げられる。

目的や背景：

本校の教育課程は、過去の国語科の研究を反映した内容とともに、地域とのつながりを大切にした学習が設定されている。しかしその草創期の教職員の思いを引き継いでいる者が異動等により少なくなってきたことから、その取組の真のねらいの継承が困難になってきていた。また、児童に付けたい力を十分に吟味せず、学習内容の意図も理解せぬまま、指導を形式的に継続し、無難に終わらせようとする意識も教職員の間で生まれてきていると捉え、本校の特長を損なう危機を感じざるを得なかった。また、学校行事等において、その趣旨を踏まえて指導しているのが企画を担当する教職員のみであったり、事後に教職員間で振り返りをする時間が十分にとれなかったりと、改善点を共有することができないまま次年度を迎える状態がほとんどであった。

よって、児童の実態を踏まえ、児童に付けたい力を念頭に置いた指導を心がけることを意図して、教職員が自ら教育課程を改善しようとする意識を高めることが必要と考えた。

活動内容：

学校行事や校内研究会において、児童の活動の様子を記録した写真を活用し、グループで振り返りを行った。写真は1グループにつき20枚程度配布し、できるだけ様々な場面が分かる種類の写真を用意したり、児童の気持ちを読み取りやすい大きさの写真を選んだりした。PDCAサイクルの考え方で、まず児童の様子や表情が分かる写真からDoを捉え、活動の成果や利点を見つけ出し、模造紙に貼り付けながら気付いたポイントを紹介し合って交流した。次にCheckを同様の方法で行い、課題を明らかにした。続いて、課題解決のためにActionについて検討を行い、児童に付けたい力を意識して具体的な案を出し合った。最後に、Actionに取り組むためのPlanを構想した。まとめとして、各グループの発表を交流したのち、代表者（校内研究主任など）が発表の相似点を指摘し、今後の取組の重点として共通理解を図った。



活動の成果：

本校では、学校行事等に関して、振り返りというのは担当から出された用紙に気になる点や改善点を記入して提出し、そのまとめが配布されて周知される、という形式で行われていた。しかしこの方法ではタイムリーな振り返りにならないばかりか、前向きな意見よりも駄目出しに陥ってしまった場合がしばしば見られた。

ところが今回取り入れた活動は、上記の問題点がすべて改善され、次に向けて建設的な話し合いをすることができた。教職員たちも大変意欲的に話し合いを進め、むしろ時間を忘れて夢中に取り組んでおり、教職員の意識改革につながっていた。また、振り返りを分かりやすく課したことになり、教職員間で課題を共有し、スムーズに具体的な案について共通理解することができた。最後に、学習活動そのものの価値についても振り返る機会となり、次年度の教育課程編成に向けて、存続か改編か撤廃かの意思確認が明確になった。



アピールポイント（アイデア）：

まず、児童の活動の様子や表情が読み取れる写真を活用することで、各々の勝手な想像ではなく実際の児童の姿をもとに話し合いを進めることができ、児童に付けたい力に焦点化した議論が進むなど、意欲的に改善を求める姿勢が教職員の間で自然に広がった。教職員にとって、児童の実態は最も大切にすべき視点であることに改めて気付かされる機会となった。

次に、記録写真さえ用意すれば、すぐに取り組むことができ、大変分かりやすい方法であることから、教職員の取組に対しての抵抗感が少なく、カリキュラム・マネジメントが実践的に有効であることを実感することにつながった。校内研究会の授業研究会においても、同様の方法で行い、回数を重ねることで協議の方法論としても確立してきた。

また、対象とする学習活動そのものの振り返りだけでなく、そのことに関わる他教科の内容や付加価値についても認識しやすくなり、教育課程の編成について教科横断的に捉えたり、学年を越えた組織運営をしたりすることにつながった。